
始まりはダンジョン(仮)

さくさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりはダンジョン（仮）

【Nコード】

N6286Z

【作者名】

さくさく

【あらすじ】

ある世界の大陸にひっそりと存在する名もなき小さな洞窟。

3人の男女がある任務を受けてその洞窟を探索することになった。

序章（前書き）

この小説を読んでくださる方へ

この小説は私が初めて書くものであり稚拙な文章であるかと思いません。

それ故に、1人の小説家―そう書いてしまつのもおこがましいかと思いますが―として、やってはいけない間違いがあるかも知れませんが。そう言った間違いを指摘してくだされば、作者は喜びで胸がいっぱいになります。

感想、誤字の指摘や脱字、またはこの書き方はおかしい、ここはこうした方が伝わりやすいのではないかと言ったアドバイスをくだされば、作者は心が踊りむせび泣きます。

誹謗・中傷・叩きといったモノを書かれると、作者はその悔しさをバネに高く跳ね上がろうとします。

未永く私の書く小説にお付き合いしてくだされば幸いです。

序章

この世で始めに生まれた人。

自然とともに生きる人。

小さき人。

誇り高く生きる人。

魔の法則を使役する人。

過去にいた魔王の残骸物。

魔力を帯びた獣。

この世界には多種多様な種族が笑い、悲しみ、愛を育み、生まれ、死を繰り返し返している。

この世界の大部分を占め、中央に位置する大陸、ここは最も広く、最も過酷で、最も人が繁栄した大陸、クツビ大陸。

このクツビ大陸の遥か西に位置する、名もなき小さな洞窟。

ここからこの物語は始まる。

第1章第1話

ネズミの鳴き声、物が崩れるような音、何かが這うような音、心が不安になりそうな唸り声、そして――悲鳴。

生きた人の呼吸する音が聞こえる。それも抑えたような、小さく息をしている。

その小さな息遣いすらも聞かれてはいけない、とでも言いたげにさらに息を殺していく。

無音。何も聞こえず、だがさらに待つ。

待つ。

待つ――。

「……………行つたか」

通路側にいる男が小さく声を出す。

「はぁー…」

その男の隣を伺っていた短髪の女が腰を下ろしつつ息を吐く。

さらにその隣にいる杖をついた大柄な男がその様子を見ながら喋る。

「まだ緊張を解くな、警戒を怠るんじゃない」

「そんなこと言っただって、このまま警戒していても体力消耗するだけでしょ？」

短髪の女は座ったまま腰に下げた袋から小さな茶色い塊のようなものを取り出して言う。

「それにあたしの代わりにレオンがその間に警戒してるからいいしょー」

「俺も休みたいんだが…」

通路を警戒し横目に見ながら苦笑する。

「ほれみろ」

大柄な男は杖を左手に持ち替えながら話す。

「次はお前だ、レオンと代わってやれ」

「座ったばかりなのにー」

小さな茶色い塊を口に入れながら軽く悪態を付き、見張りを交代する。

「しっかしさっきのモンスターはなんなんだ？」

「さてな…」

見張りを交代した男―レオン―と大柄な男が話を交わす。

「魔物だったりして」

短髪の女は通路を見ながらそう言った。

「お前はもつと周囲を警戒しろ」

「まあまあカール、さっきの奴を気にせず見張りだけをやれって言う方が酷なものだって」

大柄な男―カール―を諷めながらレオンは喋り続ける。

「それに話しながら見張りをやればいい話じゃないか」

「……………」

カールは不機嫌そうに黙っている。

それを見たレオンは焦ったように話す。

「ここで言い争いしてもしょうがないだろ？そんなことよりもさっき見た、骸骨のモンスターについて話したほうが有意義だろ？な？」

それを聞いたカールは目を閉じながら息を吐きつつ言葉を出す。

「そつだな」

レオンはその言葉に笑みを浮かべる。

その笑みを見たカールは苦笑する。

「貸しだからな」

「了解です、カール隊長！」

右手を心臓に位置するところに手を当てレオンはそう少し大きめ

に声を出す。

その声に驚いた短髪の女は、レオンをジト目に見ながらこう言った。
「隠れてんだから静かにしてなよ、レオン隊員」

手元にあったランプに火を着けながらレオンは話を切り出した。
「それでさっきのモンスターなんだが」

「俺は3年程冒険者をやっているがあんな生き物見たことがない。
いや、生き物といっていいのか？アレは」

「あたしもない、ちなみに冒険者歴、あたしは4年」

「…先輩でしたか」

「フツフツ、敬いたまへ」

その茶番を聞きながらカールはこう話した。

「私は見たことがある」

その言葉に漫才をしていた二人は同時にカールの方に向いた。
それを様子を見たカールは少し得意気にこう話す。

「…学院の古い本でだが、あのモンスターに酷似したものが」

「そつえば学院出身だったな、カールは」

「なんて本？」

短髪の女は興味を引いたのか言葉を投げかけた。

「魔と人と獣」

カールはさらに得意気に言った。

「知らねー」

「俺も分らないな」

短髪の女は興味を失ったのか、頭を掻きながら言葉を吐いた。
その様子にかールは少し不快そうな表情になった。

「あー、でさその本にどんな事が書いてあったんだい？カール」

カールはレオンを横目に見ながら声を出す。

「あのモンスターに酷似していた頁にはこう書かれていた」
杖を右手に持ち替え、話し始めようとする。

「おい、長くないように手短にねー」

と短髪の女は手をひらひらとこちらを見ずにそう言った。

「…分かった、手短に話そう」

一言だけこう前置きをしつつ話しを始める。

「アンデット、と言うものに聞き覚えはあるか？」

「あんでつと？」

短髪の女は同じ言葉を繰り返す。

「…リビングデッド、生きる屍だったか、確か」

呟くようにレオンはそう言った。

「簡単にいえば死者が不完全に蘇った結果で生まれたモンスターだ」

「蘇ったって、リーホ様でも出来ないんじゃない？」

短髪の女は少し驚いた風に話す。

「そう、出来なかった。故に生きる屍、と言うことだ」

カールはさらに話を続ける。

「過去に死者を蘇らせようとし、この世を我がものにしようと企むものがいた」

「——魔王、か」

言葉を吐くように短髪の女はそう言った。

「じゃあさっきのはあの戦争の生き残りのってことか？」

「心配するな、それはない」

不安そうに言ったレオンに、カールは腰にぶら下げた袋から水の入った皮袋を取り出しつつ、元気づけるようにこう話した。

「力ある魔王の配下は200年も昔に魔王と共に滅びた。今私が言ったのはその戦争に参加できなかった、力のない魔の物。残骸さ」

「その戦争の生き残りは確かにいたが、それも。戦争で完全に滅びた」

そう言って水飲むカールに短髪の女は問いをかけるように言った。
「力のない魔物ね、さっきの骸骨がか」

水を飲み終えたカールは肩を竦めながらこう言った。

「力がないと言っても今を生きる我々には十分驚異さ。200年前の戦争で魔王は滅ぼせたがこちらでもタダではすまなかったようだからね」

自分が抱いていた疑問をレオンは口にする。

「それにしてもここ一帯に魔物は存在しないってギルドから聞いたんだけど」

「そこはギルドにイチャモンついてガツポリと頂くチャンスだよ」
短髪の女はニンマリとした顔でそう言った。

それを聞いていたカールは空になった皮袋を元に戻しレオンらに声を掛ける。

「休憩を済んだことだし、そろそろ行くぞ」

「簡単な依頼だつて聞いていたのにねー」

周りを警戒しながら短髪の女はそう言った。

それを聞いたレオンは苦笑しながら声を掛ける。

「生きてるだけで儲けものさ」

レオン、カールという順番に通路に出る。

「まずは左だ、警戒を怠るな」

カールはそう皆に聞こえるように言った。

「了解」

とレオンは元気に返事をした。

左手にランプを持ちつつそのまま進んでいく。

「？」

足音がしない。

「どうしたんだ、早くこのダンジョンから出るんだろ？」

後ろを振り返りながら二人に言葉を投げかけた。

返答の代わりに何か大きなものが倒れる音がした。

返事をしないことに疑問を抱き、後ろの方に光を照らす。

大きな塊のようなものが床に置かれているのが見える。

手元にあったランプをその塊を近づける。

大柄な人間の形をしている。

「カール…？」

さらに奥から水が溢れるような音がする。

レオンは腰にあった剣を右手に持ち構え、ランプで前が見えるように照らしつつ歩んでいく。

水が滴る音がする。

血の臭いだ。

「そんな馬鹿な…」

小さく呟くように言った。

「…こんなことって」

さらに臭いが濃くなる。

人影が見える。

2つだ。2つの人影だ。

1つは小さく頂垂れてるかのように首を下げ、もう片方はその影の2倍近くあるように見えた。

さらに近づく。

臭いがきつくなる。レオンは震える手を抑えながら進んでいく。

その大きな人影が引き抜くような動作をする。

もう1つの人影は支えを失ったかのように音を立てて倒れ伏す。

「あ…あ…」

倒れた人影に光が当たる。

先程まで会話し、その知恵に助けられ、いつも元気づけられていた。その彼、カール。

同じく先程まで会話を交わし、悪態を付きながら、その楽観的な性格助けられていた。彼女。そして——レオンの思い人でもあった。

「シェリー…！」

倒れ伏した人影—シェリー—にレオンは声を上げる。

その声を聞き、大きな人影は身じろぎし、こちらを向くように見えた。

その大きな人影の顔に位置する場所には、2つの黄緑色の光が見え

る。

「っ！」

手に持ったランプをその人影に投げつけ、それと同時にその人影に向かつて走り出す。

ランプはそのまま闇へと飛んで消えていく。

が一瞬、左の暗闇の何かに光が当たる。

そこに目がけて、レオンは右足を踏み込み——それと同時に剣を力強く突き刺す。

「くっ！」

手応えなし。いやわずかに引っ掛かる感覚がした。

いける、レオンはそう思いつつ周りを警戒する。

壁に背を向ける。

左側にはさきほど投げたランプの光が見える。

右側は暗闇が広がっている。あそこにはカールがいる。

そして前のは1メートル程先に壁が見える。

足元にはシェリーとその血が広がっている。

神経を尖らせ、周囲の物音一つ逃がさないようにする。

さきほど見た光を探そうと、周囲を目で探る。

仲間亡きいま、自分が頼れるモノはこの剣だけ。右手に持つ武器を握り、存在を確かめる。

鉄が落ちる音がした。左からだ。

目を向ける。ランプの近くには先程はまで無かった長い棒状のようなものが見える。

それはどこかで見覚えのある物だった。

注意深く見ると刃のような薄く尖った形をしていた。

それを見て何か感じたのか、首を下げ右手に持つ剣に視線を合わせる。

「——え？」

手に持っていた剣の刃が付け根から先までなくなっている。

「——」

首元で何かすり抜けるような感触がした。

体から力が抜ける。

足元から力が抜ける。

頭から地面へと向かっていく。

自らの体重に叩きつけられ、頭のどこかにヒビが入る感覚がした。

血の臭いで鼻がうまく効かない。

首元が熱い。

体が暖かくなってくる。

目の前にシエリーが倒れている。

手足に力が入らない。

声を出せない。

意識が遠のいていく。

指先の感覚もなくなっていく。

耳が遠くなっていく。

何も見えない。

そして最後に意識がなくなる直前、生きるものを挫くような声を聞いた。

「————カエドキカ」

第1章第1話（後書き）

とりあえず今日はここまで、次の投稿は今日の夜か明日の零時にします。

第2話

魔物とは何か。

魔王が世界に撒き散らした過去の残骸。

人にとっての生きるためには不必要なモノ。

人が生活を豊かにするためには必要なモノ。

今を生きる人々にはそのような認識しか残っていない。

人にとっては過去は過去でしかなく、今生きるためにはその認識で良いのだ。

現代に残っているモノは力無き魔物の子孫、その殆どは現代に生きる人にとってのエサでしかないのだから。———そう殆どは

名もない小さな洞窟。この場所は賞金首や盗賊と言った、決して表には出られない日陰の者たちが住み着く場所。

このような所を人はダンジョンと呼ぶ。

その奥深く最深部に位置する場所、そこに人影が見える。

その人影は2メートル以上もあり、石で出来た椅子に座り、身じろぎ1つしない。

最初に目につくのは暗闇でも見える黄緑色の2つの光。

頭に位置する場所にそれは存在する。

全身が黒い靄のようなものがかかっていた。

下半身には布のようなもので覆われ隠れている。

左腕は肘掛けに肘を立て、手に頭を乗せている。

右手は真っ黒な槍を持ち、右の肘掛けに乗せ、じっとしていた。

「———」

数刻ほど経っただろうか、身じろぎせずただ一言だけこう言った。

「
「
「
「
ヒマダナ」

その名もなき小さな洞窟、そのさらに西に位置する海沿いの街、トナミ。

トナミは元々は小さな町であり、細々と漁業で成り立っていた。

しかし50年前の戦争で、この町は王国に貢献し、王国との繋がりも得て大きく発展した。

そのため、この街は様々な種族が行き交いしている。

街の入口から真っ直ぐ行った所にある大きな建物、ここは冒険者たちが集う場所、ギルドと呼ばれている。

そのギルドの最上階にある1つの会議室、この部屋は窓がなく、光は四角いテーブルの上にある不思議な光を放つ柱のみ。

そのテーブルを囲むように座る4人の人影が見える。

「最初の1行からそろそろ1ヶ月か」

1つの影が呟くように言った。

それを聞いたその影の前に座る男がしゃがれた声で訂正するように言った。

「正確には28日だ」

「冒険者を新たに送りますか？」

眼鏡をかけた男が問いを投げる。

「適当な者を用意してくれ」

男のしゃがれた声がさらに続けるように話す。

「情報はある程度知らせてよい、内容は前と同じに生きて洞窟に関する詳しい情報持ち帰ることと冒険者の回収、名目上は冒険者の救出となるがな」

「あの」

今まで黙っていた小柄な人影がか細い声で呟いた。

「それよりも帰らない冒険者のご家族が」

それを聞いた男がうんざりとしたように言葉を吐く。

「冒険者に死は付きもんだつてのに」

「亡くなられた冒険者の保持していた財産はすべてギルドが引き受ける筈ですが？」

眼鏡をかけた男は不思議そうに話す。

「大方、仇を取るために情報が欲しいんだろう」

「今回の冒険者の中に身内はいないはずなのだが…」

「偽証ですね、たまにあります」

しゃがれと声の男に眼鏡を掛けた男はそう返した。

声のしゃがれた男は左手を出しこう言った。

「行方不明の冒険者のプロフィールを見せてくれ」

それを聞いた小柄な人影が、手のひら程の大きさの白い長方形の箱と、親指ほどの大きさの複雑な模様をしている透明な板を取り出す。

その白い箱の底に、透明な板を差し込んでから相手に差し出す。

「こ、これです、ギルド長」

受け取った男―ギルド長―は白い箱の

すると白い箱の上の部分から画像や文字が空中に浮かび上がる。

「レオンハルト・エクスナー、この人のご家族だけです」

小柄な人影はそう呟く。

ギルド長は目を細め白い箱を見る。

「この男か…」

その白い箱を見ながら、僅かに目を見開く。

その様子を前で見ていた男は問う。

「なにか不味いのか？」

ギルド長は面倒なことになったと言いたげにこう言った。

「…王族に列ねるものだ」

それを聞いた3人はピタリと動きが止まった。

ギルド長は両手を前に組み、テーブルに乗せてため息をする。

「…しかし変ですね」

いち早く冷静さを取り戻し、眼鏡をかけた男は呟く。

「例え偽名でも王族ならば誰が見てもひと目でわかるはずなのですが…、まさか」

「そのまさかだ」

ため息と共にとしゃがれた声で返す。

「問題はこの冒険者のことで異論を仰っている御仁の方だ」

「ご存知なのですか？」

「……………ユリアーネ王女だろう」

吐き出すようにギルド長はそう言った。

「おいおいおいおいおい！」

男は焦ったように声を荒らげ喋る。

「不味いなんてものじゃないだろう！」

「あ、うえ、と、ど、どうでしょう……」

「どうしたもクソもあるか！何で王女がこの街に来てるんだよ！」

男と小柄な人影は慌てふためく。

「リン」

しゃがれた男は声をかけた。

「は、はい！」

小柄な人影―リンは背筋を伸ばし声を上げた。

ギルド長は話を始める。

「先ほど帰らない冒険者のご家族が、と言ったな？」

「え？あ、はい、そうですか……」

リンは不安げな表情をしている。

「咎めているのではない、ただ確認だ」

安心させるようにしゃがれた声でギルド長は優しく話した。

「はい…そう仰っておりまして…」

「結構」

問題は解決したという風に一言そう言いながら、白い箱を操作し浮かび上がっていた冒険者の情報を消した。

「へ？」

リンはそう言う、訳が分からないといった風に面食らう。

眼鏡の男は納得がいったという風な顔をする。

「つまりどういう事なんだよ」

「我々は何も知らなかったと言うことですよ」

何でもないようにそう声に出した。

ここで2人は合点がいったという顔をする。

「長も人が悪いな」

男は顔を歪ませて笑い、ギルド長を見ている。

ギルド長は静かにこう話した。

「王女としてではなく、家族として来ている。ならばそういう対応をしているだけだ」

「あとは王女様を何とか説得出来れば問題は解決と言うことですね
安心したように眼鏡を掛けた男はそう言った。

「説得できずとも王女がこの街にいるという噂を流せば、自ずと諦めて城にお戻りになるだろう」

「さらに時間が経てば王国からお触れが出る。その時に王女を王国に引き渡せばよいのだ」

眼鏡を掛けた男の話し続けるようにギルド長は話をした。

「くれぐれも王女様御一行から目を離すことのないように」

皆の目を見ながら確認するように言った。

「話しは戻るが」

ギルド長は静かに話しを始める。

「あの洞窟で何があったのか分かるものはいるか？」

ギルド長は3人を見渡すように問いかけた。

「前の会議で知つての通り最初の1行はCランク、つまりその辺のモンスターでは相手にならない、と言うことを念頭に置いてください」

そう言つて眼鏡の男は黙つた。

「んー」

軽く唸りを上げて男は考え込んでいる。

リンは確認するようにこつ言つた。

「魔物の可能性はありませんか？」

「聖域を抜けてわざわざあの洞窟に待ち構える意味が分からないな」
その問いに男は返す。

「現代に聖域を抜けられる魔物がいるのでしょうか」

肩をすくめつつ眼鏡の男は話した。

ギルド長は結論を出し、話を続ける。

「一先ずは保留だな」

「他に何かないか？」

「……………」

その問いかけに誰も答えることのできるものはいなかった。

「今は情報が欲しい。予測でもなんでもよい、妄想と捕らわれる発言でも結構、好きに述べよ」

その言葉に効果があったのか、リンを初めに話し出した。

「地盤沈下で」

「只の事故死はどうでしょう」

「もしかすると魔人だったりしてな」

「報告を怠っただけだったとか」

「いや、案外……」

3人は考えられる限りの可能性を上げていく。

その様子を見て、ギルド長―50年掛けてこの街、トナミをここま
で発展をさせた男―は仕方ないとも言わんばかりに顔を俯けてた
め息をついた。

（――しかし）

目を閉じてギルド長は思索する。

（最初のCランクが、次にC+のランクの全滅、そして最後に送っ
たBランク相当のパーティも既に全滅していると思ってもいいだろ
う）

（可能性があるとしても魔物はない――と言いたい）
僅かに目を開け、今だに3人が話している様子を見、さらに思索す
る。

（予感がする。50年前にも感じた、あの予感が）

（最低でも聖女の聖域を越えることの可能な魔物――今の時代に
倒せるものがあるのか？）

第2話（後書き）

次の投稿は明日の夜8時～10時の間に行います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286z/>

始まりはダンジョン(仮)

2011年12月21日20時46分発行